

KUNO News

2018年リニューアル号

H30.7.2(月)
編集発行: 広報チーム

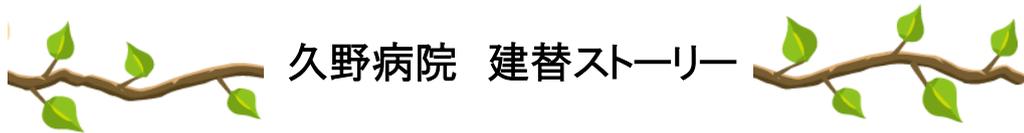
初夏のさわやかな風が木々の緑とたわむれる頃となりました。

旧病院時代から院内情報伝達誌として長年親しまれてきた『KUNO LetteR』は暫く羽を休ませていましたが、今年度よりクラークを中心とした広報チームを新設し、地域に開かれた病院を目指して院内の情報を発信するために『KUNO News』として新しい展開を試みております。

今回のリニューアル号は“特別なものにしよう・皆様に久野病院について大々的に知ってもらおう”とオープンな病院を発信することで、より久野病院を好きになってもらおうという思いが沢山詰まった広報誌となりました。

皆様にとって『KUNO News』が医療・健康に関する情報発信の一翼を担うことができれば幸いです。

| | | |
|----|-----------------------------|----|
| 目次 | ○ 久野病院建替ストーリー ～院長の思い～ | 1 |
| | ● 当院の理念・コンセプト | 3 |
| | ○ 2017年度 医療福祉建築賞受賞 | 11 |
| | ● 医療福祉建築賞とは | 12 |
| | ○ 医療福祉建築賞 講評 | 13 |
| | ● 院長 受賞スピーチ | 14 |
| | ○ あとがき | 15 |



久野病院 建替ストーリー

創設

久野病院は、1981年に初代院長により急性期病院として創設。二代目院長により2000年に慢性期医療にシフトされ、現在の医療機能提供の原型が整った。現在は三代目院長として医療に勤んでいる

慢性期医療の 充実期

祖父、父へと受け継がれ、人材育成を通じて慢性期医療のソフト面は少しずつ熟成された。利用者からの医療機能に対する評価が高まった。

患者の重度化

当初、療養型病床群は「患者様の療養環境」とリハビリによる「機能回復」に重点がおかれた制度設計であった。しかし診療報酬制改定に伴い患者さまはコミュニケーションを図ることが難しいほど重度化している。(人工呼吸器の患者様が全体の15%)

地域の久野病院 へのイメージ

療養型の病院に対する地域の理解は少なく、また老朽化した病院の外観から『久野病院に一度入ったら退院できない』と噂されることもしばしばあった。こうした地域住民がもつイメージはスタッフの頑張りだけでは抗うことができなかった。

世代交代

そんな折、先代院長の父から私たち兄弟(現院長、副院長、理学療法士)に、次代を担う者として、将来の病院のあり方の再構築(ソフト)と病院施設(ハード)の建替えの推進が託された。

復帰や治癒が ゴールでない 医療

久野病院では他の病院では受け入れにくい医療度の高い患者様を受け入れている。そのような患者様に接して、治癒をゴールとできない医療の提供には、「患者様の療養環境」「機能回復」ではない何かが必要だと感じていた。



ある慢性期病院が
目指したもの

その頃大阪にある療養型病院を見学し、その理事長の話聞く機会があった。「当院では患者の重度化が著しく話し掛けても反応がない。また、この年代は親子関係が良好とは限らない。そんな中で談話室に飾られた昭和のポスターを見て、息子さんがふと大阪万博に連れてもらったことを思い出し、『あの時は親父ありがとう』とつぶやく。それを聞いたお父さんが心なしか微笑んだ。そういう場を作りたい。**人間最後は家族との心の通い合いが大きいんだ。**」と話した。

私たちが目指す
慢性期医療の姿

我々、医療従事者ではできないことがある。そこで家族にきてもらって一緒にケアをしてあげてほしいと思った。そこで、

**『最後のときまで患者様の笑顔を支え、
家族も一員となる療養型チーム医療』**

を建替計画のコンセプトに掲げた。

40 m²/床の中
で実現

こうしたコンセプトの実現に向けスタートを切った。しかし、敷地の規制から **40 m²/床しか面積を確保できない**。最近の慢性期病院が45~60 m²であるのに対し、制約が大きい。療養病床で離床効果などに評価の高い各室便所は、利用できる患者様が少ないため採用せず、3ヶ所をタイプ別の病床に面して分散配置している。

使う方たちへの
建物のトリセツ

設計時、スタッフの意見を吸い上げ設計者と議論し、ひとつずつ建築を組み立てていった。しかし、その思いは時と共に風化していく。そこで**エントランスホールにコンセプトウォールを設け、病院の想い、設計者の想いを描いた**。家族への入院案内時にはこれを用いて説明しており、病院と家族、そして地域をつなげる入口になっている。

当院の理念

みなさまの**笑顔**を求めて
'CLEAN' 清く 'HONEST' 正しく 'GENTLY' 優しく

患者さまの **尊厳** を守り

患者さまに **穏やかな** 言葉とまなざしで

患者さま、ご家族さまの悲しみや痛みを自分のものとしてとらえられる **広い心** で

患者さま、ご家族さまの喜びを自分の喜びととらえる **優しい心** で

私たちは自己を高め、よき医療人である前によき人間であることを願う、魅力的な人間の集団を目指します。



当院のコンセプト

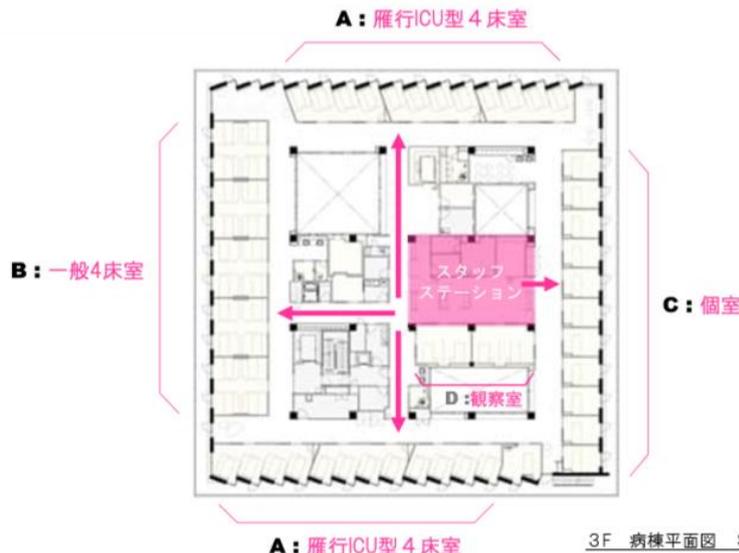
理念に基づき、当院で最期を迎える患者さまが多い中で、「自然や原風景を感じられる環境を整えること」、そして、ご家族との時間を長く過ごしていただけるよう、お見舞いに来ていただきやすい環境を整えることに重要視しました。それにより、「ご家族がスタッフとともに患者さまを支えていく環境」をつくりたいと考えました。

時にはご家族さま同士で励まし合い、助け合う関係も生まれます。限られた運用費用、スタッフ数の中で患者さまを支えていくためには、ご家族も一員となる療養型チーム医療が重要であると考えました。さらに、建物側で実現できないことは運用面で補完し、竣工後も細やかなフォローも行い運用改善していくことにしました。



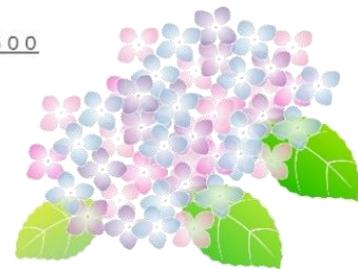
コンセプト 1. 患者さまの笑顔を支える

1. 少ないスタッフでも安全安心な看護を可能とする病棟計画



スタッフステーションを中心とした看護動線を最短化する
正方形の病棟

病棟は正方形平面としてスタッフステーションをどの病室にも均等に近くなるよう中央に配置しました。病室は患者さまの様態別に最適な多様なタイプを用意し、病棟群ごとにスタッフステーション、トイレ、手洗いとの近接性を考慮して配置しました。



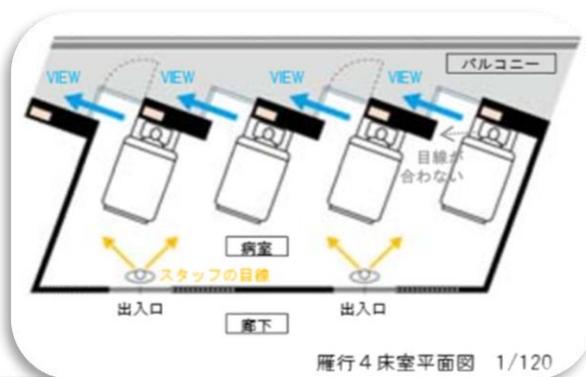
2. ひと目で患者さまの様態を把握でき一人ひとりに眺望を確保した^{がんこう}雁行ICU型病室

ほとんどの患者さまが寝たきりで、自分の意思を伝えられないため、安心感を得るにはスタッフがいかに早く異常に気付けるかが重要となります。ICU型のベッドレイアウトを基本に、扉を2ヶ所にするすることで、患者さまの様態を廊下からひと目で把握できるようにしました。また、枕側の壁柱を雁行することで一人ひとりに窓を設け、竹林などの原風景が眺められるように工夫しました。



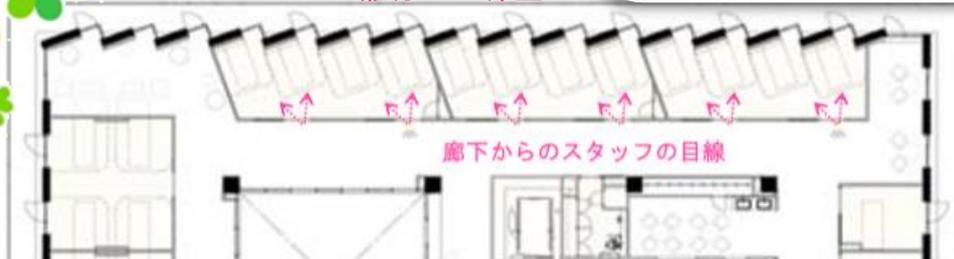
雁行ICU型4床部屋

廊下から全員の患者さまの様態が
確認できる雁行 ICU 型 4 床室



A: 雁行 ICU 4 床室

雁行 4 床室平面図 1/120



下側から観察しやすい ICU 型ベッドレイアウト



観察しやすい 2ヶ所の出入口



・ 患者さまの様態に最適化した多様な病室タイプ

A: 雁行 ICU 型 4 床室
廊下から患者さまの様態が確認できる ICU タイプの病室。



雁行 ICU 型4床室以外にも、患者さまの様態に合わせて最適な形の病室タイプをご用意しました。また、身の回りのものは全てリースにしてベッド周りをすっきりさせました。床頭台やアウトレットの位置をモデルルームで確認し、徹底的に看護のしやすさを追求するとともに、全て病棟で 8 m²/床を確保しました。

B: 一般 4 床室
人工呼吸器をつけた患者さま向けの病室。
様態が安定しており室内での処置がしやすい病室形状。



C: 個室
ご家族さまとの時間を大切にしたい終末期の患者さま用に
ゆとりのある個室を用意。



D: スタッフステーションに面した観察室
科礼が必要な重症患者さま向けにスタッフステーションに
面して配慮した病室。



3. 3つの中庭により四季の変化や自然を感じられる明るい病棟

病棟フロアには 3 つの中庭を分散し、紅葉や竹林、水をイメージしたモザイクタイルなど、それぞれ異なる設えとしました。病院の中でも四季の変化や自然を感じることができ、寝たきりの患者さまでも特浴への移動時にいろいろな中庭を見て散歩気分を楽しんでいただけます。

中庭1：赤のテラス

モミジを設えた赤のテラス

中庭2：青のテラス

水をイメージしたモザイクタイル青のテラス

中庭3：緑のテラス

竹を設えた緑のテラス



2F 病棟平面図 S=1/500



青のテラス



赤のテラス



外来待合



緑のテラス

コンセプト2：多職種とご家族が参加するチーム医療

1. 多職種とご家族のコミュニケーション

医師のほか、多職種のスタッフとご家族が一緒になって患者を支えるチーム医療。ご家族がいると患者さまも安心して柔らかな表情をみせてくれます。

当院は、患者さまやご家族の望みを伺って、それに寄り添い、患者様の笑顔を最期まで支えるというコンセプトを掲げています。患者様のためにもご家族を含めて最適なケアを心がけています。長年当院に入院されている患者様のご家族から『やっぱり久野病院に居たらホッとする。落ち着くわ。』という大変嬉しいお言葉を頂きました。久野病院の職員は全員が1つの家族であり、さらに患者様そのご家族も同じく1つの家族です。



2. 快適で多様なご家族の居場所の創出

病棟のデイルームはまとまった広いスペースを設けるのではなく、ご家族に少しでも長く患者さまとの時間をもっといただく為に、患者様の処置や面会の合間に食事や読書ができ、リラックスして過ごしてもらえようような多様な居場所を用意しました。

現在は患者さまがお亡くなりになった後も、親しくなった別のご家族と話しに来られる方もおり、ご家族同士のコミュニケーションの場にもなっています。



子供を遊ばせながら過ごす



中庭の外に出てリフレッシュ



お世話の間に外を眺めながらお弁当タイム



面会の合間にカウンターで仕事



オムツ交換の間ベンチで気分転換



読書をしながら親の起床を待つ

3. 身近な位置にあるスタッフステーション

病棟の中心にあり多方面に開くことで、ご家族が職員へ気軽に話しかけやすいスタッフステーションとしました。

平成 29 年度より各階に病棟クラークを配置しましたので、ご用命の際は気軽にお申し付け下さい。



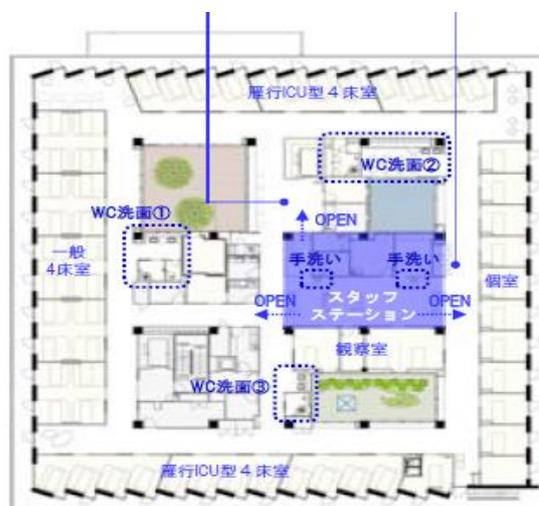
4. 中庭廻りに分散させた共用トイレ・洗面コーナー



当院の患者さまはトイレを利用できる方が少ないため病室ごとには設けず、中庭廻りに共用の手洗いとセットで配置しています。

各病室からもアクセスしやすいように均等に分散させ、ご家族が処置の合間に利用しやすく自然を感じられるように計画しました。

これらの手洗いは職員も利用し、スタッフステーション内にもアクセスしやすい位置にスタッフ専用の手洗いを配置しています。



5. ご家族に病院の特徴を知ってもらうためのコンセプトウォール

1階外来の壁面に病院関係者と設計者が新病院に込めた思いを表現しています。患者さまのご家族に久野病院を理解してもらうための工夫です。

採用面接で訪れた面接者にもここで病院の考え方の説明を行っています。

面接者は、このコンセプトウォールを見て非常に感銘を受け、久野病院へ入職したいという気持ちが高まると現職員は言います。是非、一度ご覧下さい。



6. 入院時の家族への十分な説明



入院前には必ず院長が時間をかけて、患者さまのご家族へ当院の特徴、急性期病院との違いを分かりやすく説明しています。これは入院後に家族との信頼関係を築くことにつながっています。

7. 空間を和ませ明るくするサイン



当院の壁面サインは昔の高速道路標識の字体で大きく書かれています。

このサインが空間を和ませ施設を明るくし、どこか懐かしく面白い字体はご家族を楽しませてくれます。



8. 臭いのない快適な環境をつくる排気システム

旧病院では、おばあちゃんのお見舞いに来た子どもが臭いのために病院に入りたがらないこともあり、新病院では臭気対策が大きな課題となりました。

病室ではベッドボードにできる空間をチャンバー^{※1}に利用し、患者さまにドラフト^{※2}を感じさせないように足元から吸い込み、天井裏で外壁サッシ上部のスリットから排気するシステムを全ベッドに導入しました。

スイッチを押すと通常の4倍の風量で換気し、10分あまりで臭いが消えます。また、病棟共有部の臭い対策は、汚物処理室や不潔リネン庫をひとつのエリアに集約させ、エリア単独の換気ダクトを計画し、屋上へ排出する計画とし、臭いが無く患者さま、ご家族にとって快適な施設を実現しました。

※1 ダクト内における空気室のようなもの

※2 一般には圧力差に起因する空気の流れ。温風管、煙突、暖房機、室内空間などの中で起こる空気や気体の流れ



コンセプト2では『患者さまの笑顔を支え続ける』ために、ご家族が過ごす空間にもさまざまな工夫が施していることをお伝えしました。

医療療養病床では病室以外でご家族が長い時間、あるいはちょっとした時間を過ごすのに適した空間が意外と少ないことが現状です。当院は患者様とご家族が最期の時間をできる限り共有することを病院設計が支援しています。

少しでも、ご家族との時間を長く過ごしていただけるよう……と院長の想いが込められています。



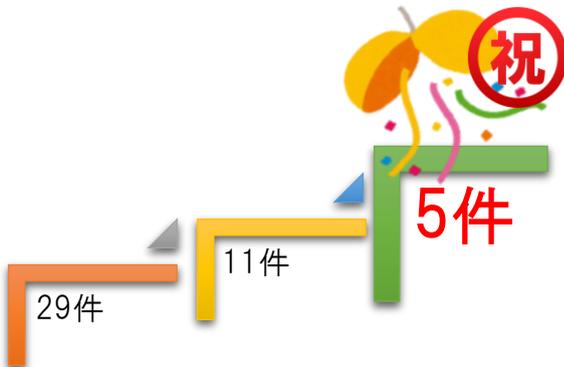
2017年度 医療福祉建築賞を受賞しました

5/18に東京で行われました「医療福祉建築賞 2017」の表彰式に院長の久野英樹が出席しました。



【表彰式 賞状授与】

医療福祉建築賞は優れた医療福祉建築を顕彰し、それを広く世に知らせることによってこれらの施設の質の向上をはかることを目的として定められたものです。優れた医療福祉建築とは建築として質が高いことに加えて患者さまやそのご家族、そして当院の職員にとって快適で使い勝手がよいこと、すなわち中身と器が調和し、いずれにおいても優れていることを意味する大変名誉ある賞です。



受賞者一覧

【医療福祉建築賞】

- ・ 特別養護老人ホーム 成仁ハウス百年の里 (岩手県)
- ・ 介護付 有料老人ホーム 新 (栃木県)
- ・ 新柏クリニック (千葉県)
- ・ 久野病院 (兵庫県)
- ・ 福岡市立こども病院 (福岡県)

【準賞】

- ・ 桜十字メディカルスクエア (福岡県)

今年度は全ノミネート 29 件の中 1 次審査で 11 件にしばられ、その中から最終審査で正賞 5 件、準賞 1 件が選出されました。なかでも当院に関しましては 7 名の審査員全員が選出して下さいました。

建物だけではなく患者さまやそのご家族、そして当院の職員にとっても非常に居心地のよい病院だということが証明されたこととなります。この賞を受賞したことによって、より一層職員も胸を張って働ける場所となったと思います。



【竹中工務店関係者記念撮影、受賞記念楯】



医療福祉建築賞とは……

この度、当院が受賞しました『医療福祉建築賞』って一体何??と思われる方が大多数いらっしゃると思います。

そんな皆さまに医療福祉建築賞について詳しくお伝えし、当院がどれほど名誉ある賞を頂いたかということを知って頂けたら光栄です。

1. 本賞の歴史

一般社団法人日本医療福祉建築協会は、厚生省(当時)の後援を経て、平成3年に「病院建築賞」を創設し、以降、平成7年に「医療福祉建築賞」と名称変更を経て我が国の規範となるべき医療福祉建築の顕彰事業を続けてきました。他の建築賞と大きく異なる点は建築として質が高いことに加え、利用者ならびに職員にとって快適で使い勝手がよいことを選考の基準としている事です。本賞創設から、27年目にあたる今年度は平成25年～27年度(3年間)に竣工した作品が選考の対象となり毎年、竣工後1年以上経つ新しい医療福祉施設を対象に優良作品を募り、厳正な審査の上、最も優秀と認められたもの数点に賞を授与しています。

医療福祉施設ほど「器と中身」の一体性が求められるものはありません。本賞ではデザインだけでなく、利用者の快適性やスタッフの使い勝手といった視点も合わせて、総合的な評価が行われます。

以前に比べ、全体の水準が上がってきた中で、機能性の達成はある意味当然という状況での受賞は非常に高い水準での選定であったと言えます。



2. 受賞までの道のり

本年度は病院15点、診療所5点、福祉施設等9点の計29点の作品の応募中、書類審査で11点が一次通過、さらに病院建築専門家を招いた現地調査を経て、厳正なる審査の結果、当院を含めて5点が医療福祉建築賞、1点が準賞を受賞しました。応募するに当たりましても厳正な基準があるため、誰でも応募できるということはないのです。書類審査で約1/3に絞られ、優れた中からまた選出され……と、27年の歴史の中では兵庫県だけで10件の受賞、神戸市だけでは6件の受賞となります。

何と言いましても27年の歴史の中で療養型の受賞は今までになく当院が初受賞ということで誠に喜ばしいことです。

3. 近隣の受賞施設

| 平成4年 | 平成5年 | | 平成7年 | 平成8年 | 平成10年 | 平成14年 | 平成26年 | 平成29年 | |
|----------|---------------------|------|------|-----------|--------|-----------------|----------------------|----------------------|------|
| 明石市 | 神戸市 | 養父市 | 神戸市 | | 三田市 | 神戸市 | 尼崎市 | 神戸市 | |
| 明石市立市民病院 | 兵庫県立総合リハビリテーションセンター | 井上医院 | 神鋼病院 | 西神戸医療センター | 三田市民病院 | 医療法人明倫会 宮地病院 | けま喜楽苑特養棟 グループホーム棟 | 神戸市立医療センター 中央市民病院 | 久野病院 |

久野病院 医療福祉建築賞講評

名古屋市立大教授 伊藤 恭行氏

久野病院のご関係の方おめでとうございます。

私事ですが、数年前に父を亡くしました。その時に最後病院で世話になったわけですが、それまでは病院は病気を治して退院していただくというのが大きな役割だと思っていましたが、最期を看取ることも病院の大切な役割だということをその時に非常に強く感じました。

今回受賞された久野病院は、人生の最期をここで迎えられる方をお送りすることを主眼においた病院だと説明いただいております。ご案内いただいたときに、2つ大事なことがあると私は理解しました。一つは、亡くられる方、旅立たれる方が、最期を、尊厳をもって迎えられる環境を作るということ、もう一つは、ご家族の方が、そこでともに時間を過ごせる場所を作る、さらにそこへ来たご家族の方も快適な時間、楽しい時間を過ごすことができる場所を作ることが大切だと理解しました。もちろん病院を設置される先生方、設置者の想いはその通りで、建築の役割はそれに対してどういう回答を出すかということが問われているのだと思います。

この久野病院の設計は、建築をどうやって評価するかってことになりますが、わたくし自身設計を本業としておりますので、非常に古臭いですが、計画と空間と構造と設備がすべて同じ方向を向いて一致した建物がよい建築だと個人的には信じております。この病院の設計は、中央部分に鉛直力を受けるラーメンの柱だけを配置して、地震力を受ける耐力壁はすべて外周に寄せるという非常に明快な構造形式をとっています。こうすることによってまず内部の空間、医療のための空間、プランニングが非常に自由になることと、開放的な中庭空間を内部に設けることができる構造になっています。内側に面して医療動線を設けることでコンパクトな医療動線で看護ができることになります。外周部に面した構造の柱には換気を含めた設備系統がビルトインされていて、これも構造と設備が一体になった構造ということで、建築の作り方が非常に折り目正しい、筋が通った作り方をしていることに非常に共感いたしました。

最初に戻りますが、設置される側のお考え、想い、理想とそれを実現するための建築の設計施工側の努力が相乗効果を起こして非常に質の良い医療空間が実現されたのではないかと思います。

久野病院のご関係の方、誠におめでとうございます。

まずはじめに、建てられた構造物だけが評価されるのではなく、そこで仕事をする私たち、そして利用される患者さまやご家族の皆さんの使用感を含めて評価してくださる賞をつくって頂いた医療福祉建築協会の皆さま、本当に有難うございます。

私事ではありますが、平成9年に大学を卒業してわずか10年で久野病院に入職しました。父親と仕事をするのを夢としていた私はこの10年の間も常に療養型の病院に求められているものは何かという視点で様々な病院をみておりました。そして祖父、父と受け継がれた病院の3代目として、就任したわけですが、設立当初は急性期の病院であったため決して療養型の病院としてはふさわしくない点がいくつもありました。

そんな視点で自身の病院を観察していた矢先に消費税が5%から8%に上がるという事になりました。35年もの歳月とともに老朽化も進んでいましたので、これを機に建て替えようと考えたのが今回の経緯でした。それまでの10年以上にも及ぶ療養型に対する想いの全てをぶつけたのが今回の病院です。

設計施工全てを託した竹中工務店さんと2週ごとに会議を続けましたが、その会議が待ち遠しくそして楽しいものでした。毎回、私が思いを伝えるとその思いを次の会には形にして提案してくれるという感じでした。そんな楽しい会議が最後となったときには『もう話し合うことはないの???』と喪失感でいっぱいでした。

私の想いのたけを形にしてくれた竹中工務店さんにも大変感謝していますし、私は自分の病院を100点、いや200点の病院だと自負しております。

このような病院をご評価いただきました医療福祉建築協会の皆さま、改めまして有難うございました。



【祝賀会風景、院長スピーチ】